

# 日本近代都市計画における都市像の探求

## Quest for City Images in Japanese Modern City Planning

中島直人 東京大学大学院工学系研究科助手

Naoto NAKAJIMA Research Associate, Faculty of Engineering, the Univ. of Tokyo

Although city images of Japanese modern city planning had been immature and indefinite, we can grasp three implicit city images in the original form of Japanese city planning; 1) industrial city conducive to development of the national economy 2) expanding city with broad suburban 3) modern city based on skeletal roads. However now we have been undergoing a paradigm shift on city planning and its city images. We are going to quest the alternatives of city images after learning the experiences of the movement for urban beauty and the movement for ideal city

### 1 日本近代都市計画における都市像とは何か

#### (1) 都市像の未熟さ、都市の目的の不明確さ

都市計画学会の学会誌『都市計画』の創刊号から最新号までの全頁を収録したDVDが発売される。そこで、是非、学会員の皆様に目を通して頂きたいのが、1952年9月発行の真紅の表紙の創刊号である。初代学会長・内田祥三の「創刊の辞」をはじめ、何れも力が入った論説が並んでいるが、とりわけ都市計画学草創の熱さを伝えるのは、初代副学会長・石川栄耀の「都市計画未だ成らず」と初代学会誌編集委員長・高山英華の「都市計画の方法について」の両論説であろう。我国の都市計画界の新旧イデオログ(石川は当時59歳、高山は当時42歳)が都市計画の過去を反省し、未来を展望している。

東京都建設局長を辞し、一線を退いていた石川栄耀は、旧法制定以来の30年以上にわたって実施されてきた我国の法定都市計画を振り返り、「都市が都市である為に必要な責任あるものであるとは云い得ない」<sup>1)</sup>と断じた。「外国」にはギリシャ・ローマ時代以来の3千年に及ぶ精神像としての都市が定着している、しかし、我国はどうだろうか。石川は我国の都市は荒涼たる「村」に過ぎないという評価を引きつつ、次のように述べている。

「そう云う村に育ち、何等ほこるに足る「都市像」を有たぬ人々が「都市計画」を求め都市計画を与えようと云うのである。従って好しそれが「世界公定」の都市計画技術の運営であろう

とその組み合わせの中から正統な都市計画の成果を得様とするのは正に此れこそ正銘の樹によって魚を求めるタグイとなる」<sup>1)</sup>

石川は欧米の近代都市計画は都市像と深く結びついている、そして道路や地域、緑地といった一見別々に見える近代都市計画の対象物も、市民の観念の中に根付いている精神像「都市」によって総合されている、と認識していた。翻って、我国では、最新の都市計画技術はあっても、肝心の都市像が未熟なのだという。

都市計画の首領に登りつめつつあった高山英華も、石川と同じように、我国の大都市が「巨大な村落である」という皮肉を引きつつ、そうした状況に対する我国の都市計画の責任を問うた。そして、都市計画が理論としても技術としても何となくまとまりにくいのは、「都市の進むべき目標とか目的といったものが、なかなか決定しにくい」<sup>2)</sup>からであり、「都市の目的がもっとも議論され、それが具体的に確立されることを望む」<sup>2)</sup>とした。

石川も高山も、都市像や都市の目的の未熟さや不明確さを我国の都市計画の欠点として指摘しているのである。しかし、この指摘を逆に捉え直せば、我国では都市像や都市の目的が未熟、曖昧にも関わらず、都市計画は確実に進化してきたということでもあった。目的があり手段があるという欧米の合理主義の常識では理解できない、日本近代都市計画の特徴である。

## (2) 日本近代都市計画に潜在する都市像

日露戦争、そして第一次世界大戦後の急激な工業化、都市化を背景として20世紀初頭に登場した我国の近代都市計画は、眼前に姿を現しつつあった大都市の病理への対処療法的な施策であった。19世紀終盤に、欧米、特にパリやワシントンといった列強国の首都の華麗な都心に憧れを抱き、市区改正と称した大規模公共事業によって、必死に街路や上下水道等を造成し始めた直後に、圧倒的な都市の膨張に直面したため、じつくりと都市像を思い描き、表明する猶予が与えられなかった。しかし、それでもその対処療法の根底に潜在する都市像を探り、断片をまとめてみれば、第一に「国家経済に資する工業都市」、第二に「広大な郊外を有する拡張都市」、第三に「骨格となる道路中心の近代都市」であったと言える。

第一の「国家経済に資する工業都市」は、都市計画の対象を個別の市域にとどめず、母都市と複合体を成している周辺町村をも含めた実質的に市街化を想定する領域とした都市計画区域制度と、その区域での計画立案を一手に担う国家機関としての都市計画地方委員会制度という非地方自治的枠組みを先ず基本とする。では国家が都市に要請したのは何か。都市計画区域の決定の際には、多くの都市が「産業都市」、「工業都市」としての構想を打ち出して、港湾や水運との関係を重視した。また、当初の用途地域は、住居、商業、工業の3地域のみで、用途制限は極めて弱く、唯一、工場が立地制限を受ける程度であった。こうした地域制は、工場と住宅との混在を防ぎ、住環境の改善・向上を目指すものというよりは、都市における工場立地を保障、促進し、工業都市化を進めることを意図したものであった。この都市像は戦時期の全体主義体制下の国土計画にも後押しされて、実際に成長した工業都市群が当初の意図通り、高度経済成長期に至るまで、日本の国家経済を支えていくことになる。

第二の「広大な郊外を有する拡張都市」は、工業化がもたらす人口集中、過密による環境悪化、郊外のスプロールに対応すべく提示された都市像であった。欧米の近代都市計画から引き継いだ反大都市主義を基調としながらも、本来母都市からの独立性を旨としたハウードの田園都市論を単に大都市の一部をなす自然豊かな郊外住宅地の設計論として受容したこと、建築線指定によって本質的な都市基盤整備なしの宅地化を事実上容認したことなどの諸事実に顕れているように、都市化に対しては受動的、傍観的、追隨的であった。地元の熱意によって偶々土地区画整理事業が実施

された地域のみそれなりの都市基盤を備えることができたが、それ以外は結局スプロール市街地が時々の都市拡張のフロンティアに形成された。この都市の膨張、フロンティアの都市開発への対応に手一杯の状況を裏返せば、広大な一般既成市街地の改善、改良のビジョンの欠如を意味してもいた。

その後、1924年の国際田園都市・都市計画協会のアムステルダム会議で整理された、都市の成長管理やグリーンベルト、衛星都市、地方計画といった「20世紀の最新型の都市計画思想」は我国にも影響を与え、都市拡張を是認する我国の都市像の変更を迫った。グリーンベルトに関しては、例えば東京では1939年の大東京緑地計画、1946年の東京戦災復興計画、そして1958年の首都圏基本計画などで繰り返し構想され、毎回頓挫し、衛星都市に関しては結局ベクトタウンとしてのニュータウン開発に転化されて、巨大な大都市郊外をもたらした。成長管理に関しても、満州国での都邑計画法での実験を経て、1968年の都市計画法制定時の線引き制度の導入によって技術的に担保されたが、その効力は不十分であった。こうした都市計画家たちの望んだ都市像は、社会的合意を十分に取り付けるには至らず、殆ど実現しなかった。

第三の「骨格となる道路中心の近代都市」は事業中心の都市計画と裏腹の関係をなす都市像である。工業都市における物流の円滑化、拡張都市における都市の一体性確保を命題とした時、骨格としての道路網を計画することこそが我国の都市計画に期待された仕事となった。肉にあたる市街地の土地利用や建築形態についてのイメージは極めて弱く、道路のみが近代都市の空間像を導いた。面的な都市計画事業として期待された土地区画整理事業においても、街路網計画によって一定規格の街路と街区が計画設計されても、その街区に建設されるべき建築物の用途や形態についての検討はなく、市街地像が立ち上がることは決してなかった。ごく例外的に美観地区や風致地区が指定された地区を除けば、都市計画が最終的に到達する空間像は道路に限定されていた。関東大震災や函館大火といった災害からの復興、全国で115都市に及んだ戦災復興都市計画においても、焼け野原に対して描かれたのは街路と街区のみで、地べたより上のイメージは明確にされず、交通面以外では従前と殆ど変わらない市街地を再生産してしまうことになった。

## (3) 都市像のパラダイム・シフトとオルタナティブ

こうした潜在する都市像が、中央集権的な都市計画の仕

組みに乗って、全国で画一的に採用されてきたというのが我国の20世紀の近代都市計画の特徴であった。勿論、誕生時に存在していた都市像は、時代の変化によって修正を加えられていった。例えば、高度経済成長にかげりが見え始めた1970年代以降の近代の問い直しの中で、既成市街地の改善・保全型の都市像が提起され、また1980年代後半のバブル景気以降、都心部の局所的な超高層の都市像が検討、議論されてきた。また近年では中心市街地の扱いに端を発し、人口減少という社会状況を踏まえて、コンパクトシティの検討が進む。これらの都市像への制度的対応も適時、実施されてきている。

とはいえ、我国において都市計画における都市像を巡るパラダイム・シフトがあったとすれば、市民社会主体や漸進的改善などを理念の根底に持つ「まちづくり」や、空間の質や多主体の協働を理念の根底に持つ「都市デザイン」といった、近代都市計画批判として1960年代に姿を現し、1970年代以降現在まで脈々と続く実践に牽引されてであった。その方向は、「国家経済に資する工業都市」に対して「地域自治を基本とする生活都市」、「広大な郊外を有する拡張都市」に対して「確かな中心市街地を有する成熟都市」、「骨格となる道路中心の近代都市」に対して「多様な境界の集合としての現代都市」であろうか。そして、それらが地域自治を基本としているが故に、各都市の選択によって多元的な都市像が生み出されている。

こう整理すれば、20世紀の日本の都市計画と都市像の変遷を概観するという本稿の責務を少しは果たしたことになるだろうか。否、片手落ちであろう。都市像のオルタナティブを探求するにあたって、逸る心を抑えてわざわざ歴史を振り返るという行為により豊かな意味を持たせようとするれば、単に乗り越えの対象であった日本近代都市計画の都市像を説くのではなく、過去に日本近代都市計画を乗り越えようとしたが叶わず、忘れられていった都市像のオルタナティブの探求を追体験していくことも必要であろう。

そうした視点で再度、我国の都市計画史を振り返れば、多くの人が実体験している1970年代以降を除き、それ以前に絞ってみても、少なくとも二つのオルタナティブの追求運動を見出すことができる。一つは、我国の近代都市計画の生成とほぼ同時期の大正末期に登場し、主に昭和戦前期に展開された都市美運動であり、もう一つは、昭和戦前期に根を持ち、終戦直後に開花し、1960年代に華々しく散ったモダニズムの建築家たちの理想都市運動である。

## 2 経験としての都市像のオルタナティブの探求

### (1) シビックアートを追求した都市美運動

我国の都市美運動は、震災後の東京にて設立された都市美研究会を前身に1926年に設立された都市美協会や、大阪や名古屋、盛岡等の類似団体に集った都市計画家、造園技師、土木技師、建築家、行政官、芸術家、評論家等が推進した一大運動であった。都市美協会等の主催で1937年から1940年までの間に計3回開催された全国都市美協議会には、全国の都市計画地方委員会や各府県、市町の都市計画関係者が多数参加した。運動の中心となった都市美協会は、次のように運動の使命を述べている。

「都市美運動の真の使命は、単に都市の細部の美醜如何を云為するに止まらず実にその都市の進路を効率的な活動場となすと同時に美しく愉快的健康地となすように仕向けてゆくところにある。斯る都市に於てこそ始めてその市民はシビックスピリットを持ちうるようになりパトリオチズムが助長される。近代の都市美運動は実にかのタウンプランニングと相俟って市民に対しその揺籃地を約束する切実重要なシビックアートでなければならぬ。」<sup>3)</sup>

ここでは都市美運動は、タウンプランニング＝都市計画と相俟って存在するシビックアートとして定義されている。シビックアートとは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカのシティ・ビューティフル運動の主唱者であるマルフォード・ロビンソンやイギリスの都市計画の父レイモンド・アンウィンらによって培われた、市民の精神的統一やコミュニティの醸成を念頭に置いた美的感覚を重視した都市づくりの理念であり、手法であった。1910年代に入ると、アメリカでは「美」に偏重し機能を蔑ろにしたとしてシティ・ビューティフル運動への批判が高まり、シティ・エフィシエントやシティ・プラクティカルを標語とする「科学」を標榜するシティ・プランニングが形成されていくのであるが、日本近代都市計画はまさにこの時期にシティ・プランニングを一つのモデルとして誕生したため、シティ・ビューティフルという標語やシビックアートという理念、手法を過去のものとして切り捨ててしまった。具体的に言えば、「美」の問題を都市計画から遠ざけたのである。しかし実際には、アメリカやイギリスでも「美」が都市計画から駆逐されてしまったわけではなく、「美」の都市計画の上に、新たに「科学」としての都市計画が重ねられて、両者が「相俟って」存在していたのである。そうした事実気付いた人々が展開したのが我国の都市美運動であった。そして、彼等は「美」を拠り所として、都市計画の在り方、望むべき都市像

を広く思考したのである。代表的な都市美運動家3名の都市像(表1)を概観してみよう。

表1 都市美運動の都市像

|                  | 石原 憲治             | 椽内 吉胤                      | 石川 栄耀             |
|------------------|-------------------|----------------------------|-------------------|
| 都市美の<br>価値軸      | 生理的な感覚<br>(アメニティ) | 都市の個性<br>(インディビジュ<br>アリティ) | 市民の親和<br>(コミュニティ) |
| 着目し<br>た対象       | 生活環境<br>(公共空間)    | 歴史的環境<br>(歴史的町並み)          | 商業環境<br>(盛り場商店街)  |
| 都市像<br>を表す<br>標語 | 住み心地よき<br>健康な都市   | 一大ホームとして<br>の都市            | 隣保団体として<br>の都市    |

都市美協会の設立者の一人で、40年以上にわたって協会活動を支えた石原憲治は、美を視覚的な良し悪しに留めず、総合的な空間の性能の問題として、生理的感覚から判断することを主張し、快適性と健康性を基盤とする都市空間づくりを提唱した人物である。様々な媒体で、主に具体の公共空間を事例に、問題を提起し続けた。市民の生活環境全般の質の向上、イギリス近代都市計画の鞏みに倣えば、アメニティ追求の先駆者であった。

石原と同じく都市美協会の創立者の一人である都市研究者・椽内吉胤は、大都市の都市風景が歴史性の希薄なインターナショナルスタイル、モダニズムの造型で画一化されていくのを批判し、未だ歴史的環境の残る地方都市の個性を守り育てていくことの重要性を説いた人物である。ここでの都市の美とは、各都市の個性、即ちインディビジュアリティと深く結びついたものであり、各都市固有の歴史性に根ざした既存の町家や町並み、河川、濠等にごそ見出されるものであった。そして、全国の都市の市街地を全て一様に改善すべきものとして捉え、その質を全国一律的に上げようとする国家集権的都市計画に対して、各都市の固有性を尊重する視点の提起は、地方分権、都市の自治の主張と連動するものであった。

また、冒頭で論説を引用した石川栄耀も独自の都市美運動で名を馳せた人物であった。法定都市計画の担い手でもあった石川は、アンウィンらの影響を受け、産業の場が生活の場に優先する都市計画、都市計画に無関心な市民をとものに叱咤するように、生活の場としての都市を商店街を中心に構想し、市民自身によるその実現を目指した。都市の本質を賑わいが生み出す市民同士の隣保的親和に見出した石川は、そうした賑わいを演出する盛り場の美的環境を追求した。晩年には盛り場を超えて市民感情を培養する美しい

都市＝名都の分析に熱中した。石川の都市美運動は盛り場を中心とした独特の都市像を掲げたが、その実は市民主体の生活空間の創造技術としての都市計画のあり方を真摯に追求したものであった。

都市美運動家たちの都市像に共通するのは、「美」を基礎とした生活の場としての都市であった。そして、特徴的なのは目的にシビックスピリットの醸成を、理念にシビックアートを掲げたように、市民の育成を理念の底流に据えていた点であった。ただし、ここでの市民は「シビル」ではなく「シビック」、私的権利の堅守から生じ、戦後の民主主義の根源となっている「市民意識(シビルマインド)」とは異なり、公的関心や共同体への愛着から発して「都市」への責任意識として顕れる「市民精神(シビックスピリット)」の醸成を目的していたことに注意したい<sup>4)</sup>。しかしこうした都市像が、戦後、民主主義の名の下で急激に私化、個人化した日本社会、自由な市場を基盤とする経済的な原理に強く左右されるようになった都市計画に受け容れられることはなかった。

都市美運動家たちは我国の近代都市計画が生み出す都市空間を具体的に批判したが、彼ら自身は明解な都市空間像を描いてはいない。一方で、明解な都市空間像を専ら描き続けたのは、モダニズムの建築家たちであった。

## (2) 描くことの意味を自問し続けた理想都市運動

戦前期の大阪の名市長で、都市計画の専門家でもあった関一は、1929年1月に『大阪毎日新聞』に寄せた「住み心地よき都市」という論説で、「骨格となる道路中心の都市像」を「いかに自動車が自由に疾駆し得る大道路が出来てもその両側に奥行二間や三間の小っぼけな家が建ち並んでいるのを見れば、都市計画は浪費なりと叫ぶものが出てもやむを得ない」<sup>5)</sup>と批判した。そして、「建築物と道路が相俟って都市が形造られる」<sup>5)</sup>「土木偏重の都市計画よりも、人間的要素を基調とした都市計画に進まねばならぬ」<sup>5)</sup>と論じた。関は漸く完成に近づいた御堂筋の沿道に並ぶべき建築物を思っていたのだろう。「現時我国の都市計画には余りに建築方面のことが閉脚されている」<sup>6)</sup>として、建築家の都市計画への関与を期待した。

一方、欧米に目を向ければ、ル・コルビュジェの「人口三百万人のための現代都市」(1922年)、「輝く都市」(1935年)、フランク・ロイド・ライトの「ブロードエーカー・シティ」(1933年)など、モダニズム建築の旗手たちが次々と理想都市像を描き、派手に発表していた。

我国でも1930年代に入ると、現行の都市計画への批判、そして建築界の世界的潮流を背景として、地方計画的配慮から一住区の建築までを統一された論理で導く都市像が発表されるようになる。その端緒は、内田祥三、高山英華、祥三の長男である内田祥文らのチームで当時の晋北自治政府に招聘され立案した大同都邑計画であった。旧市街地に手をつけず、周囲に巨大な三日月上の近隣住区理論を適用した新市街地を4次に分けて新設する、実施前提の計画であることを忘れさせるほどの明解な都市像が示された。

内田祥文は続いて、1941年にグループで東京改造案を『新建築』に発表している<sup>6)</sup>。内田祥三に加えて、前川国男、坂倉準三というコルビュジェの真弟子、我国の建築界のモダニズムの先導者が揃ってエールを送った。内田らは、職住間の距離を如何に縮めるかを主要な検討事項とし、東京の将来の理想的な土地利用計画案を提案し(図1)、更に住生活の具体的な空間像を都心部構想連続住宅、中間部低層小連続住宅、外周部・独立菜園付住宅の3種を描いた(図2)。しかし、現状の人口700万に対して、この案では僅かに300万しか収容できず、どう見ても実現性の低い理想都市像であった。

終戦直後には、法定都市計画の限界を感じていた石川栄耀の発案で、東京の主要大学が担当した文教地区計画や、銀座、新宿等を対象とした復興計画コンペが催された。高山英華や丹下健三、吉阪隆正ら気鋭の建築家たちがこぞって焼け野原に理想像を描いたが、卓抜の才能を発揮してことごとく一等をさらったのは内田祥文であった。しかし、体の酷使で急死してしまう。命を削ってまで都市像を描き続けたのは何故なのか。

戦災直後に描かれた復興計画の絵姿は、当時の厳しい財政状況や土地の権利関係からすれば、到底実現しそうな理想都市像であった。その点を指摘して「塗紙計画」と揶揄して建築家たちのナイーブさを批判するのは容易であった。しかし、彼等が理想都市像と現実の都市計画の関係について苦悩し、思考していたことは余り知られていなかったように思う。内田祥文の遺稿は、「理想都市」論であった。

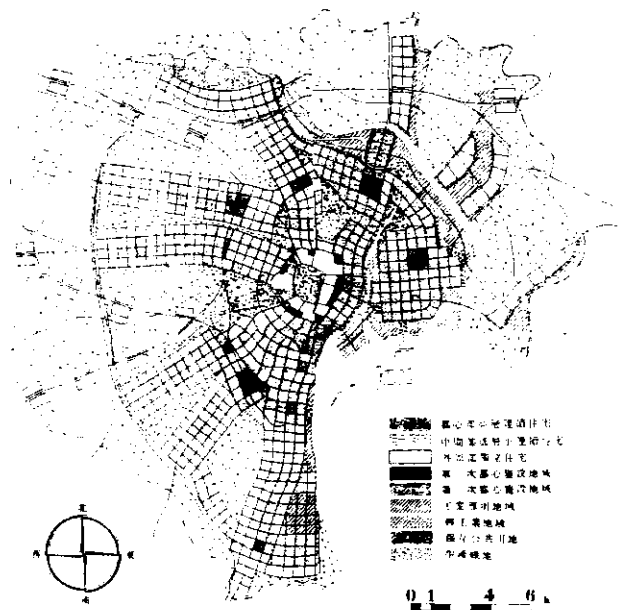
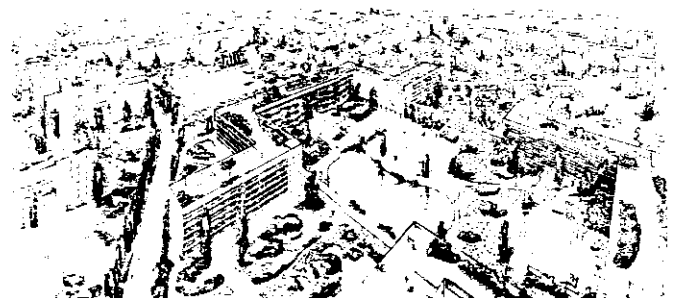
内田は都市計画をただ建築計画の大きな集合体として陶酔的にしか考えていなかったかつての自分にとって、理想都市は神秘の泉であり、現実の都市計画には侮辱と公憤をさえ感じたと素直に吐露しつつ、「理想の彼方に逃避して、現実の不满を高踏の見地より揶揄すれば足りるのであろうか?」<sup>7)</sup>と自問している。そして、理想都市像の意義を実現性に

ではなく、「現実の都市計画より時間的に先行した或る距離を保ちつつ、しかも、最も強烈に現実性に連結して、その不満、その欠点を逆形として解明に反映して居る」<sup>7)</sup>という点に見出した。現実の都市を一度否定した上に肯定して立つとその方法を表現したのである。

内田と並んで、終戦直後に最も精力的に都市像を提案したのは、京都大学の西山卯三であった。1946年1月に復刊になった『新建築』は西山の「新日本の住宅建設」特集であり、翌年の「新しき国土建設」と併せて大部の構想を発表した。その西山も、内田と同じように、1948年に「現代理想都市論」を書き、都市像を提案する意義を論じている。

西山は冒頭の石川や高山と同様に、都市像の不在を指摘し、「予防的規制が総合的になり、規制される客体が複雑高度化するほど、計画がみちびいてゆくべき目標を具体的に描いておく必要が高まってくる。「彼岸」ではなく「此岸」の、達せられるべき都市の理想像をわれわれは今やつくるべく要求されている。」<sup>8)</sup>とした。「都市の理想像は都市が現実

第4案の現地適用図

図1 内田祥文らの土地利用計画案(楠瀬正太郎担当)<sup>6)</sup>図2 内田祥文らの都心部住宅群案(内田祥文担当)<sup>6)</sup>

つくられる形を示す設計図ではない。かえてゆく過程を具体的に指導するモデル<sup>8)</sup>であり、「その時代の都市の現実の姿と社会の要求との矛盾・衝突の反映」<sup>9)</sup>するものと定義した。ここでも、理想都市の価値は、その実現性ではなく指導性に置かれていた。

1950年代に入ると、戦災復興計画が実際化し、都市の理想像が結局彼岸の計画に終わることが見えてくると、建築家たちの都市像探求の意欲は一旦失せた。しかし、我国における都市設計という職能の確立に情熱を注いだ丹下健三がその意欲を再び喚起した。「建築家よ都市像を持とう」と呼びかけ、1961年の「東京計画1960」まで突っ走った丹下とその研究室の精力的な活動に触発されて、1960年代を通じて、様々な都市像が再び世間を賑わせることになった。

しかし、都市像を描くこと自体の意味を深く検討していたのは、丹下よりも西山であった。西山は1960年の世界デザイン会議で、「現状維持の「ことなかれ」主義からふみでて、環境の創造的転換をおこさせる有力な手段の一つとしてある種の「計画」を提示する仕事提起される。それは現実の諸条件と諸要求の中に横たわる矛盾を計算しつつそれらを総合し、具体的な形をもった空間的計画として将来像をまとめあげたものである。それは、事態の進路を人びとに正視させ、どうしてもとらねばならない地域の構成・環境の造成のさまざまな原則を空間的イメージによって承認させてゆく役割を果たす」<sup>9)</sup>、「都市計画はしたがって単なる「完成品」計画ではあり得ず、発展のプログラムでなければならない。しかし、それがその健全さと進歩性とを確保しうするためには、つねに豊かで総合的なすぐれた「構想計画」に先導されていなければならない。」<sup>9)</sup>とする構想計画論を発表した。

この西山の構想計画論は、逆説的ではあるが、丹下のすぐれた「構想計画」である「東京1960」への批判によって更に進化していくことになった。西山は自動車の全面的肯定や大東京主義といった内容面の批判に加えて、改めてこうした構想計画の社会的インパクトに注目し、実現可能を主張すればするほど、善意で提出された都市像が悪用される危険性、権威主義の誘惑といった課題を見出した。西山は、結局誰のためにどのような意図で都市像を描くのかを透徹する姿勢の必要性を説いたのである<sup>10)</sup>。

1970年の万国博覧会で理想都市は時間的先行性を喪失し、運動の熱は冷めた。描かれた都市像は過去に回収されてしまった。しかし、内田から西山へと続いた都市像を描くことの意味の探求は、現代性を失ってはいない。

### 3 今、都市像のオルタナティブの探求へ

以上、20世紀の日本の都市計画と都市像の変遷を概観した。しかし、ここまで来て、再び冒頭の石川の論説を吟味する必要を感じる。石川は、都市像を市民の観念の中に根付いている精神像だとした。日本近代都市計画に潜在する都市像は、果たして市民の観念に根付くようなものであったろうか。こうした問いかけは、都市美運動が持ちえた市民精神の醸成という目標、そして理想都市運動が最後に行き着いた誰のためにどのような意図で都市像を描くのかという命題と深く関わっている。都市像を如何にして市民の精神像へと高めていけるのか、オルタナティブの探求の最終的な課題はこの点にあると思う。

#### 参考・引用文献

- 1) 石川栄耀(1952)、「都市計画未だ成らず」、『都市計画』, 1, 3-4, 日本都市計画学会
- 2) 高山英華(1952)、「都市計画の方法について」、『都市計画』, 1, 25-31, 日本都市計画学会
- 3) 阪谷芳郎(1931)、「都市美創刊に際して」、『都市美』, 1, 1, 都市美協会
- 4) 佐伯啓思(1997)、『「市民」とは誰か 戦後民主主義を問ひなおす』, PHP選書
- 5) 関一(1929)、「住み心地のよい都市」、『大阪毎日新聞』, 1月17日, 大阪毎日新聞社
- 6) 内田祥文ら(1941)、「新しき都市 東京都市計画への一試案」、『新建築』, 17(4), 133-183, 新建築社
- 7) 内田祥文(1946)、「理想都市」, 日本建築文化連盟編, 『計画建築文化の基本問題』, 50-89, 相模書房
- 8) 西山卯三(1949)、「現代理想都市論」, 建築学研究会編, 『新建築の展望』, 139-149, 内外出版社
- 9) 西山卯三(1961)、「構想計画」(西山卯三(1968)、「地域空間論」, 572-574, 勁草書房)
- 10) 西山卯三(1961)、「現代の理想都市—《東京1960》をみて—」, 『新建築』, 36(5), 124-128, 新建築社